

言語普遍性と言語類型論

Language Universals and Linguistic Typology

バーナード・コムリー 著

松本克己・山本秀樹 訳



言語普遍性と言語類型論

統語論と形態論



バーナード・コムリー著

松本克己・山本秀樹訳



ひつじ書房

言 語 学 翻 訳 叢 書

【第1巻】 言語普遍性と言語類型論

—統語論と形態論—

発行	1992年5月18日 初版1刷
定価	3296円（本体3200円）
著者	©バーナード・コムリー (Bernard Comrie)
翻訳者	松本克己・山本秀樹
発行者	松本 功
装丁者	手嶋正弘
製版所	株式会社レオプロダクト
印刷所	株式会社萬友社
製本所	有限会社大島製本所
発行所	有限会社ひつじ書房
	〒344 春日部市増田新田429-76
	TEL 048-736-7767
	FAX 048-736-9881
	振替東京 2-142852

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などがございましたら、
小社からお買上げ書店にておとりかえいたします。
ご意見、ご感想など、小社までお寄せ下さいます幸いです。



ISBN4-938669-07-2 C3081 P3296E

日本語版への序文

日本の読者のために、『言語普遍性と言語類型論』のこの訳書へ序文を寄せることを大変嬉しく思います。

過去 20 年にわたって、私は、言語現象を十分に理解するためには広範な諸言語からのデータを検討する必要があるという立場をとってきました。世界の諸言語に見られる幅広い変異に対処できる言語理論への到達を望むとすれば、これ以外に道はありません。本書は、言語学へのこのようなアプローチから生まれ育った最も重要ないくつかの考えを総合し、例証しようとしたものです。

この種の研究は、もちろん、諸言語の比較研究に関心を持つ人々にとって最大の関心事となるでしょうが、他の領域に主たる関心を寄せる言語学者にとっても重要です。たとえば日本語という単一の言語の研究に専念する言語学者にとって、その言語が世界の他の諸言語とどのような点で類似し、どのような点で異なるかを理解するのは大切なことです。近年、日本語に関して、とりわけ英語や他の西ヨーロッパの言語との対比から、そのいわゆる特異性について多くのことが書かれてきました。しかし、日本語の多くの特性（たとえば動詞を文末に置く語順）が、実は、世界の諸言語でごく普通に見られるという事実には注意が払われませんでした。単一の言語についての包括的な主張は、言語間の変異に関する知識を背景として、はじめて可能になるのです。

文法理論に専心する言語学者にとって大事なことは、構築した文法モデルが言語間で実証された幅広い変異に十分応えられるものでなければなりません。ある言語で起こり得るという可能性を排除してはならないし、一方でまた、論理的には可能でも人類言語には起こりそうもないという可能性を排除する必要もあるのです。およそ 20 年前、生成統語論の主唱者たちは、統語理論を発展させる最良の方法は単一言語（実際には英語）の詳細な研究であると信じていました。しかし、過去 15 年間の進展は、最も形式的な統語論研究においてさえ、言語間の変異（ときには「パラメーター化」とも呼ばれるもの）が言語の形式的モデルの構築に決定的な役割を演じることを明らかにしました。

本書によって、日本の言語学者が、たとえ日本語やまた他の個別言語の研究に専念するにせよ、あるいは言語理論に主たる関心を寄せるにせよ、言語間の変異について省察する機会を得られればと願います。しかし何よりも、本書によって、今後ますます多くの日本の言語学者が、言語に対する最も魅力的でしかも実りある展望と見られるこのような言語間の変異の研究に取り組まれることを切望してやみません。

1991 年 8 月

バーナード・コムリー

第2版への序文

『言語普遍性と言語類型論』に対する需要が続いていることから、改訂版を出す運びとなった。以前の重刷の際には、誤植や小さな誤りの訂正および文献情報の更新にとどめた。しかし、(第1版の原稿を書き上げた)1980年以降の、類型論や普遍性研究に限らず、さらに全般的に文法理論における展開により、本書にやや実質的な改訂を加える必要が出てきた。主な改訂は第1章と第11章で、第1章については異なった基本データの比較として今では時代遅れとなった部分を新しいものに置き換え、また、第11章は実質的に新しく書き改めたものである。その他の章については、第2章に新しい題材が加えられたが、概して変わりなく、主な違いは、本文の表現を一部明確化した点と参考書目を更新した点である。

第1版に対して書評された人々、およびさまざまな形で意見を寄せられた人々、特に南カリフォルニア大学の筆者の学生諸君に対して、謝意を表する。

本書の主な目的は、第1版と同様、類型論および言語普遍性研究に対して、やや変更を加えながらもグリーンバーク的な考え方から概説することである。本書では、他の研究方法の支持者との詳細な論議を扱うことも、また、そうした他の研究方法に対して委曲を尽くした解説をすることも、この種の概説書には不適当と思われるため、避けることにした。扱われたテーマの領域は実質的に変わっていないが、ただし、本書において類型論および普遍性の研究を解説する上でのテーマの選択は、おおむね個人的なものである。

ここで、本書の本論において示した言語普遍性および類型論に対する筆者の見解の主な特徴を強調しておくのがよいだろう。世界の諸言語は豊かな多様性を持ったデータを提供してくれるもので、それらに基づいて、人類言語に潜在する一般的特性を研究することができる。(ただし、この資料の豊富さによって、言語資料が消滅しやすいという事実を見失ってはならない。言語は、驚くほどの速度で消滅しつつあり、この事実、人間の環境における他の領域での破壊に対しては警告を発する人々の間でさえも、公的な関心を引き起こすことが驚くほど少ないのである)。人間の言語の潜在特性を理解するためには、す

すべての言語に共通する特性についての興味深い陳述が可能な程度まで十分に限定されているばかりでなく、諸言語間に見られる多様性の幅についても洞察力のある特徴づけを可能にする柔軟性を十分に備えた、方法、記述、分析を開発する必要がある。諸言語の比較は、主として、諸言語から現に与えられるさまざまなデータによって行なわれるべきものである。いかなる比較、あるいは実際のところいかなる記述においても、ある程度は抽象化された表示が必要となるものだが、言語記述に対して、過度に抽象的なアプローチに依存すると、比較されているものが、言語ではなく言語に対する言語学者の考え方（あるいは誤った考え方）ということになる可能性が、事実上大きくなってしまふ。しかし、だからと言って、非理論的な立場を示唆しているわけではない。ただ、現在支配的な文法理論による主張の一部に対して、少なくとも慎重な態度はとるべきである。ここで提唱した視野から普遍性や類型論の研究を行なう言語学者は、自分たちが確立する通言語的な一般化に対して、説明を探究していかなくてはならない。ただし、ある特定の説明（特に、生得性のような、大体において検証不可能な説明）を先験的に受け入れてしまうことは、言語学者に、それに代わる説明の可能性を見失わせることにしかならない。本書において提示するアプローチは、人類言語の性質に対して説明的な記述を与えようとする試みのひとつに他ならないのである。

第1版への序文

言語研究の最前線において英語の統語分析に主要な関心が向けられていた一時期の後、最近10年間は、広範な諸言語からのデータを使った言語類型論および言語普遍性の諸問題に対する関心が著しく増大した。この枠組みの中で非常に多くの研究がなされてきたにもかかわらず、今日まで、言語学の学生のためにこのアプローチの主要な特徴を総合的に扱おうとした一般的な概説書はなかった。そのため、まったくの初歩の段階から、個別のテーマに関して論文の形で専門家の書いた文献を見るしかなかったのである。そこで、本書の目的は、この隔たりを埋め、上級の大学生および大学院生に対して、言語類型論および言語普遍性に対する現在の主要なアプローチの概観を、この方法による成果を例証（および一部の危険性に関して警告も）しながら、与えようとするにある。

比較的短い期間にきわめて多くの研究文献が現れた分野において、本書は、必然的に、取上げたテーマの領域に関して非常に選択的なものになっており、全領域に関して皮相的な概説をするよりはむしろ、あるいくつかのテーマに関して詳細に扱うことを優先させた。また、大体において、類型論および言語普遍性に関する最近の研究に限っており、この領域における以前の研究に対する歴史的な説明を与えようとはしていない。ただし、以前の研究については、特に、最近の研究でカバーされていない範囲については言及してある。ここでの選択には、必然的に、ある程度筆者自身の偏りが反映されており、筆者自身が研究してきた領域や、最も興味深い成果が期待できると思われる領域を選んである。本書では、音韻的な普遍性も、例証のための題材としては所々で利用しているが、ほとんど統語・意味的な普遍性だけを対象にしている。少数の領域の研究を論評する議論の方が、普遍性および類型論に関して出された主張を、注釈せずに、いかに包括的であっても、ただ列挙するよりも、価値が高いと思われるからである。

最初の2つの章は一般的な性格のもので、言語普遍性に対する最も実りある研究は、広範な諸言語からのデータに対する考察を基にして行なわれ得るものであるという筆

者の考えを提示かつ議論しており、統語・意味的普遍性を、言語に対するある総合的なアプローチの内部に位置づけている。このアプローチにおいては、普遍性に対する説明は、言語の形式的な特性の範囲内で求められるよりむしろ、(統語面や音韻面も含めた)種々のレベルにおいて、言語の形式的特性を言語が機能する言語外のコンテキストに関連づけることによって探求される。それ以降の章は、大部分、個々の構造型や他の統語現象に対する考察である。すなわち、語順、関係節、使役構文、格標示などを、統合的なアプローチによって、広範な諸言語からのデータを用いた類型論および普遍性研究の視点から考察するものである。ここでのテーマの選択は、おおむね筆者自身の関心を反映した恣意的なものではあるが、この選択は、仮に他者による選択に比べて特に優れたものではないにしても、けっして劣るものでもないと言ってよいであろう。

謝辞を述べるにあたって、本書の執筆および本書における考え方に対して寄与されたすべての人々の名をあげることは困難である。類型論や普遍性の研究というのは、必然的に、言語および言語学における他のほとんどすべての局面に関する研究と相互に関連するものなので、言語に関する筆者自身の考えに影響を与えたすべての人々を網羅するようになりリストは割愛せざるを得ない。従って、以下に述べる謝辞は、種々の章における注の中で具体的に謝意を表した言語学者のほか、普遍性および類型論に関する筆者自身の考えに影響を与えた人々、および本書でとり上げた特定の提示様式に対して影響を与えた人々に関するものである。

ジョゼフ・グリーンバーグ(スタンフォード大学)から受けた筆者の恩恵は、ほとんどあらゆる頁においてははっきり現れている。1人の言語学者として他の誰よりもグリーンバーグこそが、広範な諸言語を基にした言語普遍研究に対して現在の関心を引き起こした学者であり、彼は、このアプローチが隆盛というには程遠い時期でさえ、このアプローチを強く提唱していたのである。エドワード・キーナン(カリフォルニア大学ロス・アンゼルス校)には、広範な諸言語に対する関心が、理論的および形式的な諸問題に対する関心と矛盾するものではないという認識を得る上で恩恵を受けた。南カリフォルニア大学の言語学科の同僚諸氏は、コンテキストの中での言語に対する統合的なアプローチへの筆者の転向を早々と理解され、この関心の展開に対して、刺激に富んだ環境を提供してくれた。

本書では、変形生成文法の主流、とりわけノーム・チョムスキーによる言語普遍性へのアプローチに対して、所々批判的にならざるを得ないが、このモデル内での筆者への教育、およびこのモデル内で筆者を教育してくれた人々によって受けた恩恵は否定できないし、また否定するつもりもない。この記述モデルの教義およびその考え方の基盤に対するその後の筆者の異議はともあれ、この理論によって、統語分析が厳格

で洞察性のあるレベルにまで高められたことは明らかで、この理論なしには本書もできなかったものと思われる。同様のことは、関係文法によって提唱された統語論モデルについても言える。統語的一般化に対する構造内部的な説明を重視している点や、その他、多くの具体的および一般的な諸問題に対する重点の置き方に関しては、筆者と意見を異にするが、統語論に対するこのアプローチは、おそらく筆者自身が見逃してしまうことになったと思われるような、統語構造に対する非常に多くの知見を与えてくれた。そして、皮肉ではなく心からの賞賛として認めるが、統語論の形式的なモデルの範囲内で言えば、筆者には、関係文法が最も発展性を有するように思われる。

さらに、種々の機関で類型論や言語普遍性の研究をしている言語学者との議論を通じても相当な恩恵に浴している。それらの人々に対しては、筆者自身の研究を一部送ることができたし、また、それに対して彼らの研究の一部も私あてに送られた。特筆に値するのは、類型論が中心的テーマのひとつであったニューヨーク州立大学オスウィーゴ校におけるアメリカ言語学会の言語学講座(1976)に参加された人々、スタンフォード普遍性プロジェクト、ケルン大学言語学科の普遍性プロジェクト、およびソ連科学アカデミー言語学研究所のレニングラード部会の構造類型論グループである。

本書に含まれた資料は、大部分、筆者の講義や演習に参加した学生たちに確認した資料から引いてある。そこで、そうしたすべての学生諸君、教授陣、およびケンブリッジ大学の講座、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校におけるアメリカ言語学会の言語学講座(1978)、南カリフォルニア大学やオーストラリア国立大学での講座に参加された人々にも謝意を表する。本書は、さらに、バジル・ブラックウェル社およびシカゴ大学出版の匿名の出版顧問による論評にも恩恵を受けている。

最後に、しばしば常道を離れたところで、しかも主流の理論言語学から離れて研究している多くのフィールド・ワーカーや母語研究者たちにも感謝の意を表明したい。彼らは、筆者の研究に対して貴重な資料を提供してくれたばかりでなく、また、この研究に対して関心を示し、われわれの間での発展的な対話を可能にすることで、筆者の研究に力を与えてくれたのである。これらの人々に筆者の目的を理解してもらえんことを願っている。つまり、筆者の目的は、彼らの言語から関係節や使役構文などを盗用することではなく、むしろ、一般言語学と個別言語の記述の双方に対する最大限に有益な発展は、これらの2つのアプローチを最大限に統合することによって得られる——互いに他方なしでは十分な発展はあり得ない——という筆者の信条を実行に移すことである。さらに一般的に言えば、言語学とはもろもろの言語に関わり、そして言語とは人々によって話されるものなのである。

第2刷へのはしがき

今回の第2刷において、一部の不明確な表現を改めると共に、参考書目を更新し、いくつかの誤植および事実に関する小さな誤り（幸い、説明の主旨には影響しない誤り）を訂正する機会が与えられた。書評された人々による指摘に加えて、ウィンフリード・ボーダー、R. M. W. ディクソン、アンドリュー・グッドソン、キム・ジョンマー、ハーバード・ペーパー、ウィリアム・ラザフォード、サンドラ・トンブソンから寄せられた意見に謝意を表す。

1982年10月 ロス・アンゼルス

バーナード・コムリー

目 次

日本語版への序文	vii
第2版への序文	ix
第1版への序文	xi
第2刷へのはしがき	xiv
1 言語普遍性	1
1.1 言語普遍性へのアプローチ	1
1.1.1 2つの主要なアプローチ	1
1.1.2 データベース	6
1.1.3 抽象化の程度	13
1.2 言語普遍性の分類	16
1.2.1 形式的普遍性と実質的普遍性	16
1.2.2 含意的普遍性と非含意的普遍性	18
1.2.3 絶対的普遍性と傾向	20
1.3 言語普遍性に対する説明	24
1.3.1 共通の系統的起源	25
1.3.2 外在的説明	26
1.4 まとめ	30
注と参考文献	31
2 言語類型論	34
2.1 類型論と普遍性	34
2.2 類型論的パラメーター	39

2.3	形態的類型論	43
2.4	その他の類型論的パラメーター	54
	注と参考文献	56
3	理論的前提	59
3.1	意味役割	59
3.2	語用論的役割	64
3.3	文法関係	68
3.4	形態的格	74
3.5	例証：英語とロシア語の節の構造	78
	注と参考文献	90
4	語順	92
4.1	語順パラメーター	93
4.2	語順パラメーター間の相関関係	98
4.2.1	グリーンバークの相関関係	99
4.2.2	グリーンバークの成果に対する一般化	101
4.2.3	一般化に対する論評	106
4.3	語順類型論の価値	109
	注と参考文献	110
5	主語	112
5.1	問題点	112
5.2	定義と範疇について	115
5.3	能格性	119
5.4	意味的ならびに語用論的要因	125
	注と参考文献	132
6	格標示	134
6.1	格の識別的機能	134

6.2	他動詞構文における自然な情報の流れ	137
6.2.1	逆行形	138
6.2.2	A と P の示差的標示	139
6.3	まとめ	146
	注と参考文献	146
7	関係節	148
7.1	英語の関係節の類型論的特徴	148
7.2	関係節のタイプ	152
7.2.1	関係節の概念の定義	152
7.2.2	語順と関係節のタイプ	155
7.2.3	関係節の中での主要部の役割	157
7.2.4	主節の中での主要部の役割	164
7.3	関係節形成への接近可能性	167
7.3.1	単文	167
7.3.2	複文的構造	173
7.3.3	関係節のタイプの分布	176
	注と参考文献	176
8	使役構文	178
8.1	使役構文の研究におけるパラメーター	179
8.1.1	形式的パラメーター	179
8.1.2	意味的パラメーター	184
8.2	形態的使役における結合価の変化	187
	注と参考文献	197
9	有生性	199
9.1	序：有生性の本質	199
9.2	有生性に制御される現象	202
9.3	概念上の有生性の区別	208
9.4	結論：有生性の本質	211

注と参考文献	214
10 類型論と歴史言語学	215
10.1 普遍性と類型論における通時的次元	215
10.2 地域類型論	218
10.3 類型論と再建	225
10.3.1 語順類型論	225
10.3.2 語順と形態素順	230
10.4 類型論と通時的説明	233
注と参考文献	240
11 結論および展望	242
地図：引証言語の位置	248
参考文献	251
言語名索引	267
人名索引	280
術語索引	283
訳者解説	291

第 1 章

言語普遍性

本章では、言語普遍性の研究に関連するいくつかの一般的な問題を考察し、言語普遍性の研究に対するある特定のアプローチを、他の可能性と対照させながら提唱する。一般的な事柄を例証する必要上、本書の本論の中で議論されることになる個々の話題もいくつか取上げている。そのため、そうした問題に対する背景知識のあまりない読者にとっては、最初は、この第 1 章の中に、所々わかりづらく思われる箇所もあるかもしれない。そのような読者の場合には、最初、第 1 章は比較的素早く読み進み、本書の本論全体をよく理解した後で、再度この章を綿密に熟読されたい。

1.1 言語普遍性へのアプローチ

1.1.1 2つの主要なアプローチ

本節では、言語普遍性に対して近年の言語研究においてとられてきた 2 つの主要なアプローチを対照させる。この 2 つのアプローチは、いくつかのパラメーターにおいて対照させることができるが、最も重要なのは、以下のようなものである。ひとつには、言語普遍性の研究の基になるデータとして、広範な諸言語を利用するか、それとも非常に限られた数の言語を利用するかというパラメーターがある。また、言語普遍性の記述に必要な抽象度のパラメーターもあり、たとえば、比較的具体的な統語分析によるか、比較的抽象的な統語分析によるかというようなものである。さらに、言語普遍性の存在に対して、どんな種類の説明が提示されるかというパラメーターがある。これらの個々のパラメーターは、その他のパラメーターも含め、以下の節において再び取上げられることになる。これらのパラメーターは論理的にそれぞれ独立したもの

であるが、實際上、近年の2つの主要なアプローチは、それぞれ、一貫してこれらのパラメーターの一方の極を代表するものとなっている。すなわち、一方では、言語普遍性の研究のために、広範な諸言語からのデータを利用する必要性を説く言語学者たちがいる。このアプローチを提唱する言語学者は、非常に抽象的な分析よりはむしろ、比較的具体的な分析によって記述できる普遍性を集中的に扱ってきた傾向があり、言語普遍性の存在に対して提示する説明の種類に関しては、特定の立場にとらわれない、あるいは少なくとも折衷的な立場をとってきた。また他方では、言語普遍性について知るための最良の方法は、少数の言語を精細に研究していくことであると考える言語学者たちがいる。そのような言語学者は、抽象的な構造によって言語普遍性を記述することを提唱し、また、言語普遍性に対する説明としては、生得性に重きを置いてきた傾向がある。この2つのアプローチのうち、前者は、ジョセフ・グリーンバークおよび彼の研究に触発された人たちの研究とおそらくもっとも密接に結びついており、本書の立場もまた、これを反映している。一方後者は、とりわけノーム・チョムスキーおよび彼の影響をもっとも直接的に受けた人たちの研究と密接に結びついたもので、正統的な生成理論の立場と見なすことができよう。

一見したところ、少なくとも言語普遍性を研究するためのデータベースに関しては、当然、グリーンバークのアプローチが正しいと思われるかもしれない。何らかの言語普遍性を打ち立てるためには、たとえすべての言語ではないにしても、広範な諸言語を見渡す必要があるからである。しかし、この問題は、決してこれほど単純に論じられるものではなく、この点に関しては、1.1.2 節に譲ることにしよう。以下、本節では、言語普遍性に対するチョムスキーのアプローチを採用する場合の理由づけについて概略してみたい。彼の論点は、以下の議論に示されるように、概念的にも経験的にも、多くの弱点を含んではいるけれども、言語普遍性の研究に関して首尾一貫したひとつの立場を示すものとして、単純に無視し去るわけにはいかないのである。

生成理論の主張によれば、言語の記述、特にその統語論において（ただし、同じ議論は、他のたとえば生成音韻論での記述にも当てはめられるであろうが）、統語表示はきわめて抽象的なものであって、言語データの中に直接観察されるようなものとは相当にかけ離れている。統語構造、あるいは、少なくとも統語表示のあるレベル、のこのような抽象性は、生成文法、とりわけ、統率・束縛理論を含めた大部分の流派を特徴づけている。

子供の第1言語習得のあり方を議論する上で、このような抽象的表示の存在を考慮に入れた場合、次のような問題が起り得る。すなわち、かりに言語構造を特徴づける最善の方法として抽象的な構造が関わっているとすれば、子供は、当然のことながら、言語習得に際してこれらの抽象的構造を内在化すると想定してよいであろう。と